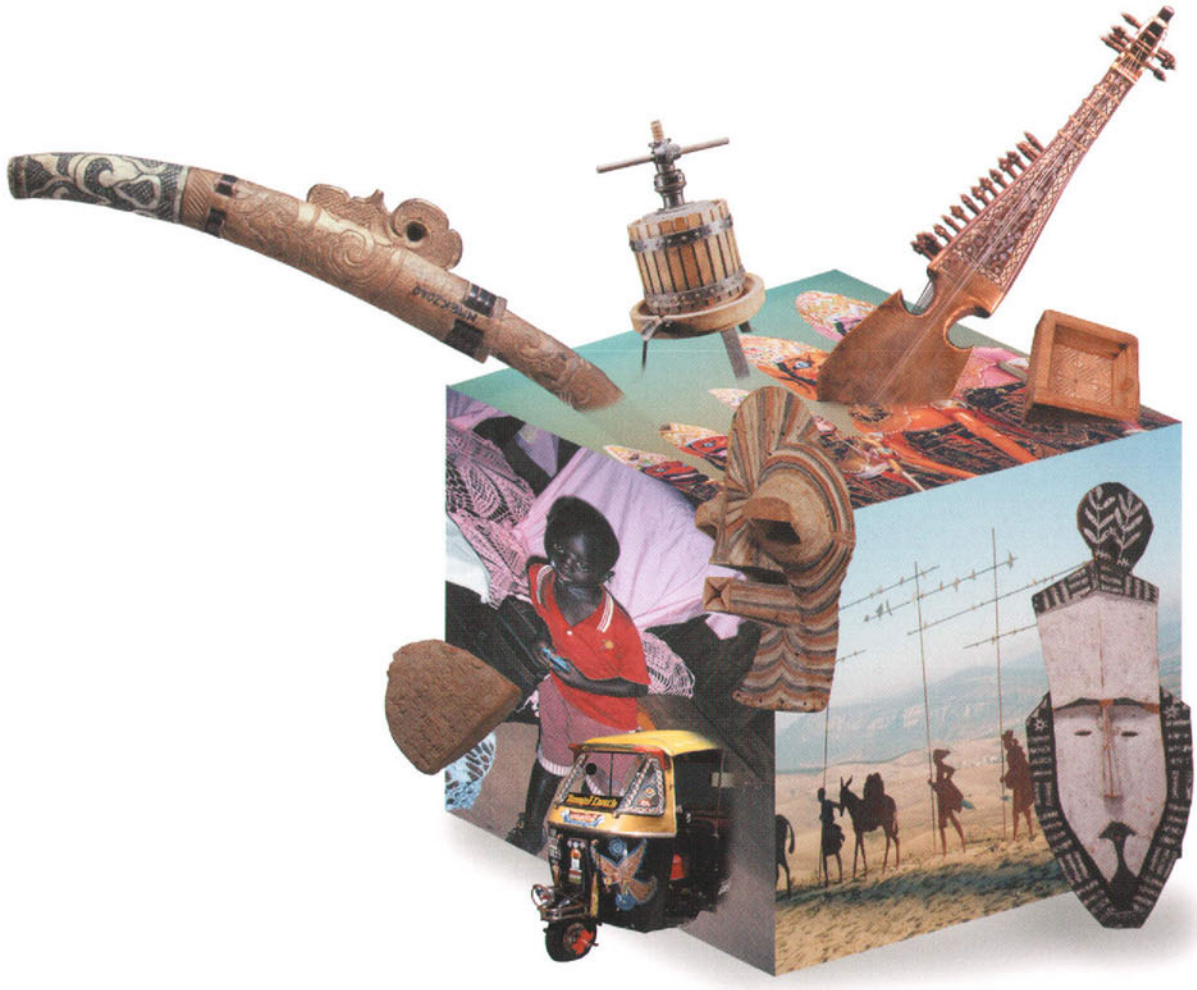
# 変貌する文化人類学

文化人類学は民族学とも呼ばれ、世界中のさまざまな地域の社会・文化を調査・理解し、
さらに、そこで得られた知見から、あらためて自分たちの文化への理解を深化させる学問である。
今日、人・もの・情報が激しく行き交う、いわゆる「グローバル化」現象がすすむ中で、
学問の前提である民族・文化の枠組み自体が流動化しつつある。
それに応じて、文化人類学とその核心をなすフィールドワークのあり方も大きく変化する一方、
異文化および自文化へのより深い理解を求める社会的要請はますます高くなってきている。
本号では、変貌しつつある文化人類学を、総研大のメンバーである国立民族学博物館での取り組みを中心に、
研究と教育の両面から特集した。
Part 1「文化人類学の視点」では、文化人類学とフィールドワークの現在を俯瞰し、
Part 2「文化人類学の最前線」では、世界各地、各分野における最新の研究成果を紹介、
Part 3「文化人類学と教育」では、座談会を通して大学院生たちの声を伝え、
あわせて文化人類学教育の現状を分析し、将来に向けた課題を提言する。